

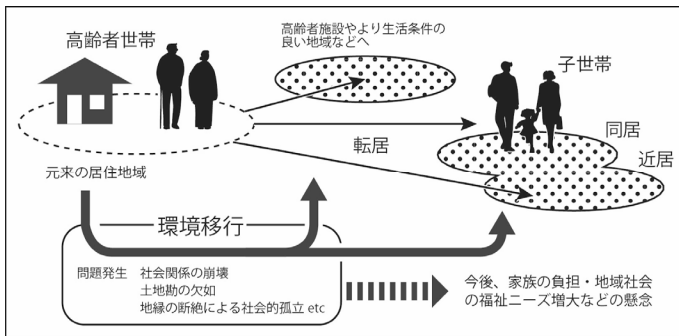
# 北京市の住宅小区における転居高齢者の社会関係の再構築

新井規之・櫛谷圭司

## 1 はじめに

### (1) 研究目的

転居は誰にとっても負担の大きなライフイベントである。特に高齢者にとって転居は、慣れ親しんだ環境が変わり、それまで築いてきた人間関係や生活スタイルを新たな場所で再構築しなければならない、大きな負担を強いられることになる(図1)。そうした高齢者の転居が日本



よりずっと頻繁にみられるのが中国である。中国では、近年の急速な高齢化にともなって、大都市で暮らす子世帯と同居するために地方から高齢の親世帯が転居してくるケースが、最近よくみられるようになった。本研究では、北京市

図1 高齢期の転居

市の比較的新しい商品住宅(日本の分譲マンションに相当)からなる住宅小区(住宅団地に相当)を事例にとりあげ、高齢者がこうした環境移行に際してどのように社会関係を再構築しているかについて、個人を取り巻く要因、居住地周辺の空間的要因、行政などの社会的要因、の3点から明らかにしたい。

### (2) 調査方法

北京市海淀区の2001~09年に建設された3つの住宅小区(図2、3)に市外から転入してきた高齢者を対象として、2011年8月末から9月中旬と11月下旬に、小区内およびその周辺

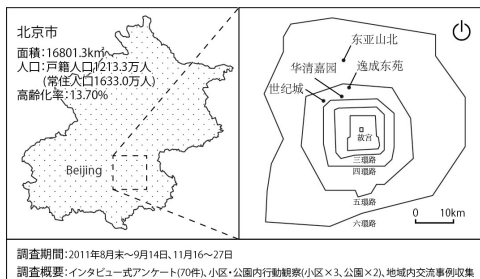


図2 調査対象小区の位置と調査概要

地域において、アンケートシートを用いたインタビュー形式の聞き取り調査を実施した。調査内容は、転居前後の住まい方の変化、転居の経緯、転居後の生活圏の構成、生活圏内での交流の状況、などである。また、交流状況と空間との関連をみるため、小区内および隣接する公園において、高齢者の1日の行動を観察した。



図3 調査対象の住宅小区

## 2 中国における高齢者の転居の概況

中国では、農村部や地方の小都市から大都市への人口移動が顕著にみられ、その中心は就業や大学進学などを目的とする若年層であるが、同時に多くの大都市では近年、人口に占める高

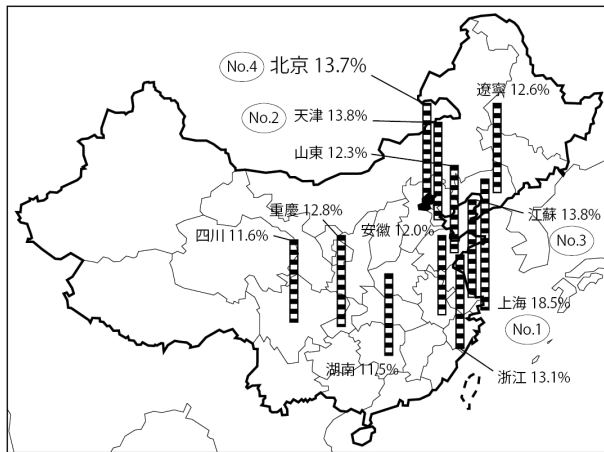


図4 各省・直轄市の高齢者の割合 (2006年)

齢者の割合が非常に高くなっている (図4)。これには、大都市で暮らす子世帯が地方に住む高齢の親世帯を呼び寄せて同居する、といった形での高齢者の転入が増加していることも影響していると考えられる。

中国には、老後の扶養は主に家族が行うべき、という観念が強く残っている。中国老齡科学研究センターの資料によると、高齢者全体の約85%が子世帯との同居を希望している (図5)。親世帯から離れて大

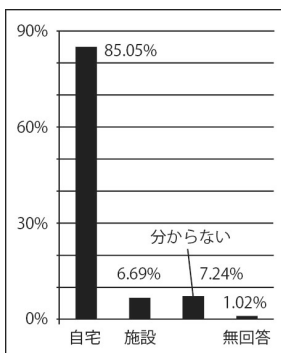


図5 希望する扶養形式 (中国老齡科学研究センター、全国老齡工作委員会「2009年度中国老齡事業発展統計公報」の資料をもとに作成)

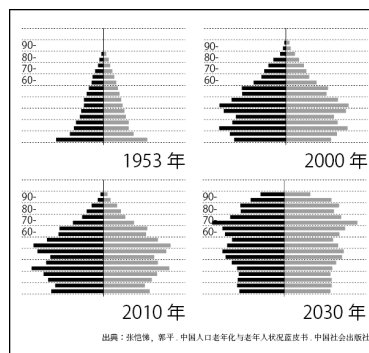


図6 中国の年齢別人口構成の推移

都市で暮らす子世帯が、高齢になった親を扶養しようとする場合、比較的自由に移動できる親世帯を自分たちの住宅に呼び寄せるケースがよくみられる。

多くの大都市では、民間企業による高齢者専用住宅 (高齢者マンション) の建設も増えている

が、高齢人口の急速な増加（図6）に対して供給が追い付かず、大都市に転入する高齢者の大部分は商品住宅で子世帯と同居するか、経済的に余裕があれば子世帯の住宅の近所に「近居」（明確な定義はないが、北京では一般に地下鉄・バス・自家用車などで概ね1時間以内で行ける距離に住むことをさす）することになる。

### 3 北京における転居高齢者の実態

北京市内の住宅小区の高齢者を対象に行った聞き取り調査により、転居の経緯や転居前後の住まい方などについて、以下のような特徴が明らかになった。なお、調査対象者の属性は図7のとおりである。

	親子世帯の住まい方	家庭周期段階(子世帯)	世帯人数	
転居後(現在)	同居 59%(41件)	I 4.3%(3件) II 20.0%(14件) III 21.4%(15件) IV 12.9%(9件) V 2.9%(2件)	1人	8.6%(6件)
	短期同居 11%(8件)		2人	20%(14件)
	遠居 4%(3件)		3人	7.1%(5件)
	近居 17%(12件)		4人	17.1%(12件)
	隣居 0%(0件)		5人以上	47.2%(33件)
	同市内 6%(4件)			
転居前	同居 33%(23件)	I 8.6%(6件) II 30.0%(21件) III 11.4%(8件) IV 8.6%(6件) V 2.9%(2件)	1人	12.9%(9名)
	短期同居 4%(3件)		2人	45.7%(32名)
	遠居 43%(30件)		3人	7.1%(5名)
	近居 6%(4件)		4人	20.0%(14名)
	隣居 0%(0件)		5人以上	11.4%(8名)
	同市内 11%(8件)			

図7 ヒアリング調査の対象者の属性

#### (1) 居住地および住居形態の変化

聞き取り調査の対象世帯は、北京市中心部から調査対象地である市の近郊への転居のほか、全国各地から北京に転入してきたもので、全体として内陸地域からの転入者が多い（図8）。

転居前後の住居形態の変化をみると、「板式→板式」「平屋→塔式」「板式→塔式」が最も多

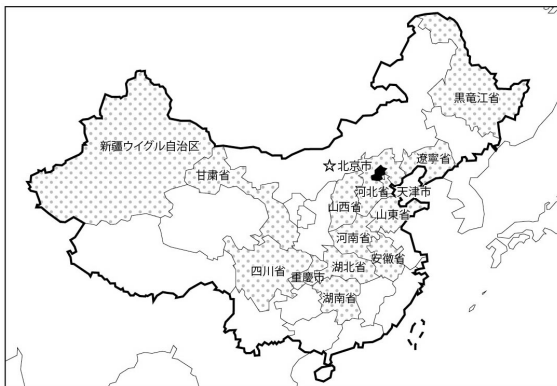


図8 調査対象者の前住地の分布

く、これら3タイプで全体の半分を占める（図9）。板式（日本の集合住宅に多くみられる共同廊下をもつ形式）から塔式（エレベータホールを中心に放射状に住戸を配置する形式）へ、という傾向は、1950～60年代に大量に建設された街坊型とよばれる中層の集合住宅（5～6階建てでエレベーターがない）から、子世帯が住む現代的な高層集合住宅に転居した例が多いことを示している。

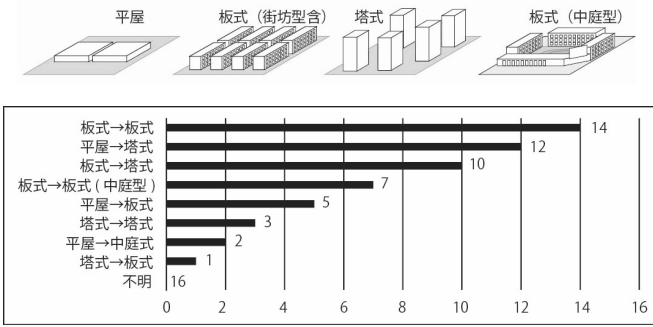


図9 転居前後の住居形態の変化

## (2) 家族間の住まい方の変化

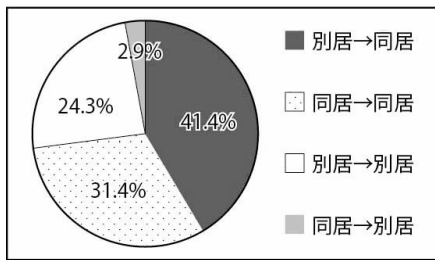


図10 転居前後の家族との住まい方の変化

転居の前後で家族との住まい方がどう変化したかをみると、「別居→同居」が全体の約4割を占め、就職などを機に北京に移り住んだ子世帯の住宅に転居してきたケースが多いことがわかる(図10)。しかし、同居に移行した高齢者の一部から「故郷や元の居住地に戻りたい」といった声も聞かれた。

次に多いのが「同居→同居」の約3割で、子世帯の転居に付き合ったもの、孫の成長などによる住宅面積の不足を理由とするもの、地区再開発による転居、などがみられた。3番目の「別居→別居」には、遠隔地から北京に来て子世帯と「近居」を実現したものが含まれる。

## (3) 転居高齢者の属性

内的要因転居群	外的要因転居群
<p>老後不安・呼び寄せなど</p> <p><b>老後不安型</b></p> <p>先に都市部に転居した子世帯による呼び寄せや、高齢者世帯自身の老後不安から、子供たちの生活する都市部へと転居を決定するもの。</p>	<p>育孫からの長期(短期)同居</p> <p><b>育孫型</b></p> <p>孫の養育のために転居をした高齢者世帯の場合、孫が成長後地元に戻る場合と、そのまま同居を続ける場合が確認された。その他、複数の子世帯がある場合先に必要な世帯と同居し手配をした後、次の家族の方に移行するというような機動的な転居も確認された。</p>
<p>より良い環境の志向</p> <p><b>生活向上型</b></p> <p>退職後など老後の環境を豊かに過ごすため郊外の静かな環境に移り住むもの。子世帯と別居(近居)などをし、それぞれの生活スタイルを尊重する例も見られる。</p>	<p>再開発による移転・戻り入居</p> <p><b>開発移転型</b></p> <p>元々の居住区の再開発など止むを得ない事情により移転を余儀なくされたもの。地縁そのものは開発時にスクラップされるが、戻り入居をしたもの同士や離れ離れになってしまった友人と電話で連絡を取りあい公園に出かけるという例もみられた。</p>

図11 高齢者の転居の類型

転居の動機や契機についての質問に対しては、孫の養育、元の居住地の再開発、老後の不安、退職、などの回答が得られた。転居の動機と上述の住まい方の変化との組み合わせから、転居高齢者の属性は次の4つに類型化できる(図11)。高齢者の内的な要因によるものが2つ、外的な要因によるものが2つであるが、実際にはこれらが複合して転居に至ることが多い。

<老後不安型(呼び寄せ型)> 親世帯が老後の不安を解消するために子世帯

帯と同居または近居するもので、子世帯が高齢の親を介護するために呼び寄せるケースも多い。

<生活向上型> 退職などを機に、より理想的な生活環境を実現するために転居するもので、自らの意思で転居を決断し転居後も積極的に周囲の環境を活用する傾向がみられる。

<育孫型> 北京に住む子世帯の子育て（親世帯から見た孫の養育）を補助するために転居するもので、一定期間の同居の後に元の居住地に戻るケースと、その後も長期間にわたって同居を継続するものの2類型がみられる。

<開発移転型> 以前の居住地の再開発にともない、補償金をもとに新居を購入して転居するものである。中国ではしばしば複数の街区にまたがる広大な面積が同時に取り壊され再開発されるため、多数の住民の転居が一斉に行われ、地域で醸成されていた人間関係が一挙に消散してしまうことも多い。

#### （4）居住継続の意思

今後の住まい方の意向を聞いたところ、2割弱の人が転居の予定が「ある」と回答し、将来は以前の居住地や高齢者施設などに再移転する意向をもつ人も少なくなかった（図12、13）。この傾向は「別居→同居」の世帯に顕著にみられ、同居してみたものの「子供に迷惑をかけたくない」「子世帯と生活時間が合わない」と思っている高齢者も多い。

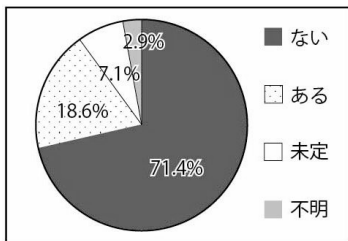


図12 将来の転居予定の有無

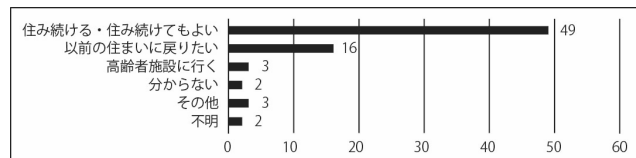


図13 将来の住まい方の希望

### 4 転居高齢者の生活行動圏の特徴

#### （1）生活行動圏の類型

転居後の現在の生活行動圏に関して、26人の高齢者を対象に聞き取り調査を行った結果、以下の5つの生活行動圏の類型が得られた（図14、15（最末尾））。

<A：小区周辺面型> 最も多くみられたタイプで、住宅小区の内部と周辺の徒歩（または自転車移動）圏内に生活行動の範囲が面的に広がっているものである。「買い物の際に友人と会って雑談をする」「自身の健康と友人との交流のためにグループ活動をする」など、徒歩圏内にいろいろな活動拠点があり、隣接する小区の庭を利用したり、近隣の複数の商業施設を生活に合わせて活用したり、というように周囲環境を合理的に活用しているのが特徴である。

<B：小区周辺+遠隔地型①> Aと同様、生活行動の範囲が小区周辺に面的に広がっているのに加え、バスや地下鉄、自家用車などを利用して遠方の公園や親類、友人の家などを訪れて以前からの関係を維持しているものである。

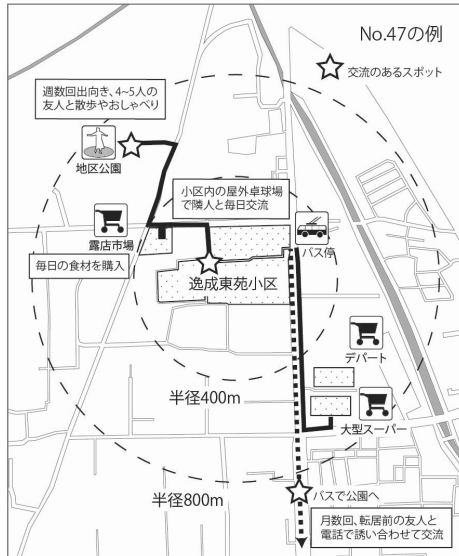


図 1 4 住宅小区周辺での生活行動圏の例

< C : 小区周辺+遠隔地型② > Bと同じ特徴をもつが、小区周辺の生活圏が比較的狭く、遠隔地での行動の比重が大きいものである。転居前に住んでいた家を現在も持っていて頻繁にそこを訪れる人や、孫の養育のために同居を開始したが孫が成長したら元の家に戻る予定の人など、現在も以前の居住地との関係が切れていないケースがこれに含まれる。

< D : 小区内中心型 > 生活圏がほぼ小区の内部に限定されるタイプである。身体が不自由になり車椅子で生活している人や、高齢になって子世帯との同居や近居を選択したが新しい環境になじめない人などがみられる。

< E : 小区内+遠隔地型 > 小区周辺での活動は極端に少ないが、遠隔地に趣味の場や交流の場を持っているタイプである。夕方に小学生の孫を迎えに出る以外はほとんど室内で過ごす人や、車で買い物に行く以外はほとんど小区の外に出ない人などがみられる。前者は転居後かなり時間がたっているのに近隣住民との交流が少ないが、後者は朝や日中に小区内の広場や運動施設を利用することで幅広い友人関係を持っており、同じ類型であっても社会関係の構築には差異がある。

## (2) 生活時間から見た活動

1日の生活時間について 14 人の高齢者に対して聞き取り調査を行い、得られた結果のうち転居時に 65 歳以上だった 6 人の平均値をみると、15.5 時間の活動時間（起床から就寝まで）のうち屋外活動が 4.4 時間（小区内 2.3 時間、小区外 2.1 時間）を占めており、かなり多くの高齢者にとって長時間の屋外活動が習慣化していることがわかる（図 16、17）。

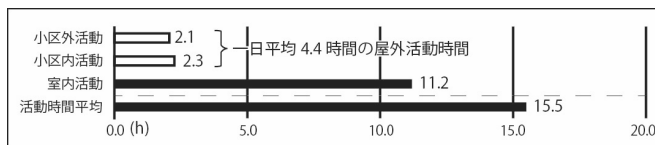


図 1 6 活動時間に占める屋外活動の時間

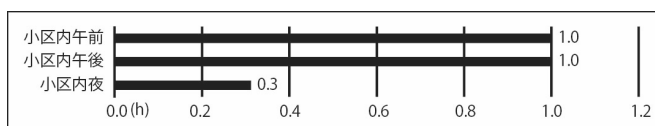


図 1 7 時間帯別の小区内活動の長さ

## 5 高齢者の社会関係形成を促す空間

これまでみてきた生活行動圏および生活時間の調査結果から、転居後の高齢者の社会関係の形成には、住宅小区周辺の徒歩生活圏に存在するさまざまな集団との交流が契機になっていることが示唆される（図 18、19）。こうした高齢者の他者との交流には、以下のような具体的な特徴がみられた。

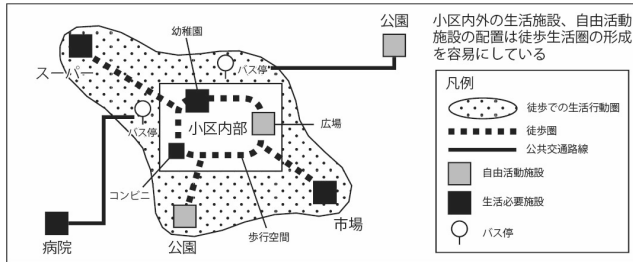


図 18 住宅小区周辺の施設分布と徒歩生活圏の例



図 19 徒歩生活圏内にみられる交流

### (1) 時間ごとの小区内の交流空間

図 20 は、ある小区内における 1 日の高齢者の行動を図示したものである。60 代以上の人の活動は昼食前と夕方の時間帯に集中しており、主な活動の場は、①円形広場、②小児用遊具のある広場、③健身器具のある広場、④丘陵の頂点の見通しのきく広場、の 4 カ所で、時間帯によってこれらがそれぞれ特徴的な活動によって使い分けられている。

### (2) 社会関係が形成される場の特徴

3つの小区における行動観察の結果から、高齢者の社会関係が形成される場に共通する空間的特徴として、①小区の構造、②広場の特性、③空間配置の特徴、の 3 点についてまとめることができる（図 21）。例えば、①は「安心して散歩ができる歩行者専用の通路が小区内を回遊できるように配置されていること」、②は「広場は人々が自然に集まってくるような求心性のある形状であること」、③は「歩行者の動線が分岐する地点にベンチが配置されていること」などで、こうした工夫によって高齢者は他の人の活動に接点を持つことが可能となっている（図 22）。



図 20 住宅小区内の活動空間の時間帯による違い

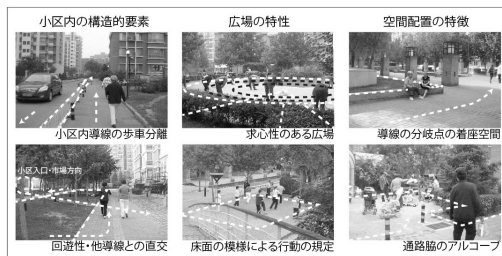


図 21 住宅小区内にみられる社会関係形成の場の空間的特徴

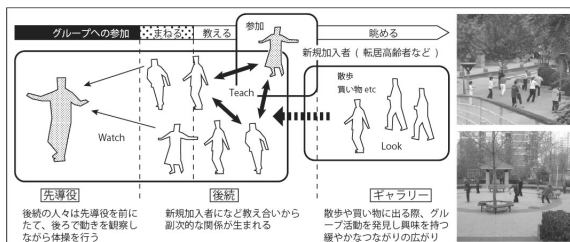


図 22 高齢者のグループ活動によるつながりの発生と連鎖



## 6 社会関係の形成を促す他の要因

### (1) 公共交通や公園入場料の無料化

北京市政府は 1999 年から高齢者に対する優遇措置として、市内の公園や博物館の入場料金と路線バスの運賃を原則無料としている。市内の公園は連日多くの高齢者でにぎわい、自身の健康維持だけでなく、友人同士の交流を深めたり新たな交友関係を作ったりする場にもなっている。上述の生活行動圏の調査では、昔からの友人や親戚などとの交流のために毎日遠方の公園に出向く例もみられた。市内各所にある大規模な公園と市内を網の目のように走る路線バスの優遇措置は、高齢者の社会関係構築の有力な促進材料になっている。

### (2) 健身器具の街角への設置

北京をはじめ中国の都市では、道路脇や小さな空地、小公園などに様々な健身器具（足腰を鍛えたり背筋を伸ばしたりするための、日本の公園にある遊具のようなもの）の設置が進められており、健康を意識する多くの高齢者に頻繁に利用されている。特に朝や夕方時間帯には、そこが人々の交流の場にもなっている。

## 7 まとめ

本研究では、北京市近郊の比較的新しい住宅小区に外地から転居してきた高齢者に注目し、転居の特徴や生活行動の実態、新たに社会関係を形成する場とその要因について、現地で実施した聞き取り調査などの結果にもとづいて検討した。転入してきた高齢者は、周囲の施設や環境を自分なりに利用することで、旧来の社会関係を維持したり新たな社会構築を構築したりしている。さらに、住宅小区の構成や近隣にある施設、および行政の施策によって、高齢者の生活行動や社会関係の構築が支えられている。これらのことをまとめて示したのが図 23 である。

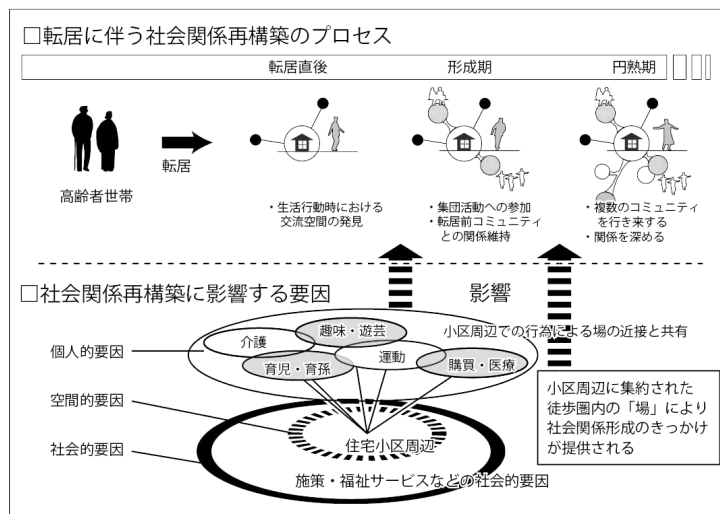


図 23 高齢者の社会関係再構築の要因と過程

本研究における現地調査の実施には、平成 23 年度新潟県立大学教育研究活動推進事業・県立大学研究奨励費（個人研究、榎谷圭司）を使用した。

参考文献

伊藤シズ子(2008)「子どもの近くに転居してきた「呼び寄せ高齢者」に関する研究－聞き取り調査の事例から－」愛知淑徳大学現代社会研究家研究報告第3号、85～94頁。

伊藤シズ子(2010)『呼び寄せ高齢者－孤立から共生へ－』風媒社。

倉沢進・李国慶(2008)『北京－皇都の歴史と空間－』中央公論社、中公新書 1908。

小井田早ほか(2007)「転居経緯からみた高優賃における入居者特性」日本建築学会学術講演梗概集 F-1、1383～1384頁。

周燕珉(2011)『老年住宅』中国建筑工業出版社。

山本健司(2008)「高齢者における「転居」が精神的健康にもたらす影響」日本建築学会計画系論文集 73、1297～1304頁。

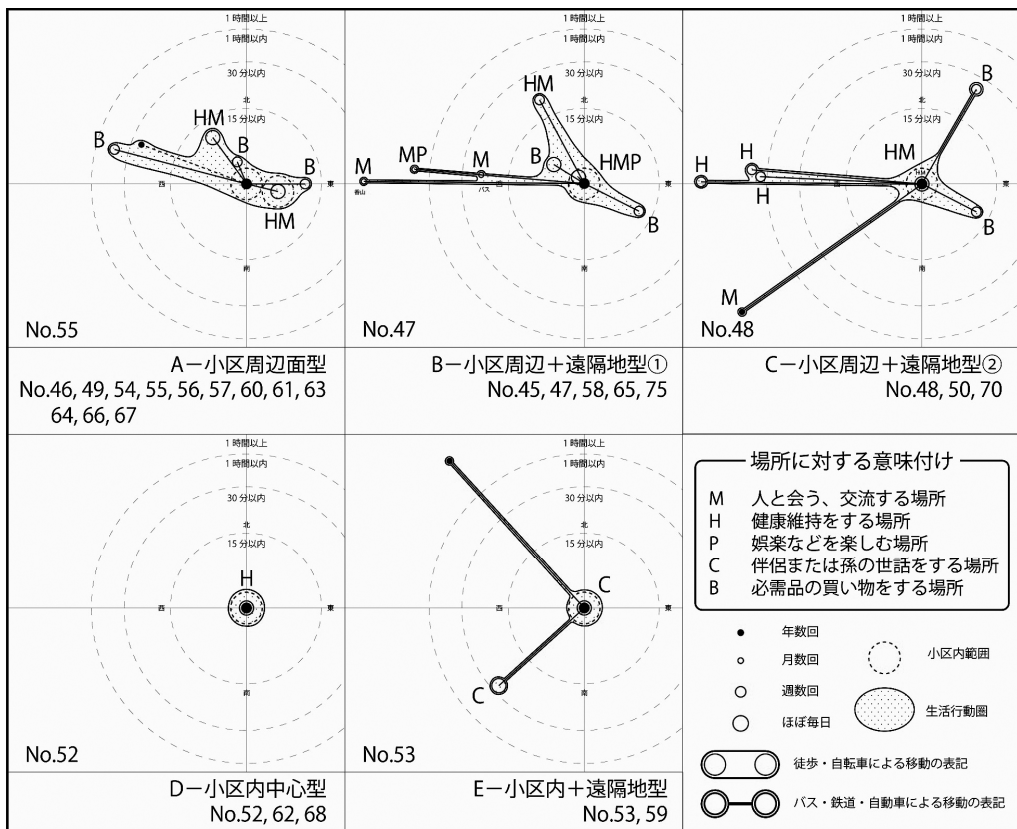


図 15 生活行動圏の形態別類型